国際社会文化研究所紀要　第13号（2011年）

明治から昭和初期における熊野地方の観光対象の変遷
――瀞峡と那智の滝を中心として――

寺田憲弘*1

Change of tourist attraction Kumano area in Wakayama Prefecture from the Meiji period to the early Showa period

Kenkoh TERADA*1

Abstract: Tourist visits his destination which has been known through media. The ideas we have about it we see already organized before we see. Guidebooks are major media of tourist information, and have an organizing function. The purpose of this paper is to identify cultural shifts through analyzing tourism discourses which is a vehicle of cultural values in a society where discourses are circulated. This study analysis for tourism discourses in guidebooks on Kumano area in Wakayama Prefecture from the Meiji period to the early Showa period. Discourses of guidebooks on Kumano show a change during the period. Guidebooks on Kumano in Meiji period selected sights which were portrayed in classical literature and draws from that, and then Nachi waterfall is salient in depictions. That in early Showa period selected sights evaluated from a scientific standpoint, and then Doro valley became the most valuable place in Kumano. Thus, tourist attraction in Kumano area varied with the development of Japan as a modern nation and institutionalization of science.

はじめに

2004年に，「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録された熊野古道は，その指定の前後から，観光対象として大いに注目されている。それは，単に観光客の増加というばかりではなく，例えば，

> 「旅行でメタボ解消」・JTBが社員旅行を投入
> JTBは関西医科大学や大正製薬などと組み，5月からメタボリック・シンドローム（内臓脂肪症候群）対策をテーマとした旅行商品を企業や健康保険組合向けに発売する。まず和歌山県の熊野古道など全国10地域への社員旅行ツアーを投入する。6月には父親の健康増進を支援する家族向け商品も発売する。2008年4月10日　日本経済新聞　朝刊
> (http://health.nikkei.co.jp/news/top/index.cfm?i=2008040910331h1 2008/09/23 取得)

というように，健康に対する関心の高さと組み合わせて，旅行代理店が新たな商品が開発したり，また，

*1 龍谷大学社会学部　助手

紀南の社寺　33カ所巡りを企画

NPO法人「熊野曼陀羅」（長谷明理事長）は4月から，紀南33カ所の社寺を参拝してまわる「熊野曼陀羅33カ所巡り」を始める。（中略）世界遺産に登録された熊野地域の歴史や文化を全国に発信するのが目的。2004年6月にNPO法人化し，準備に取り組んできた。熊野地方を何度も訪れてもらう方法として，社寺巡りを企画した。熊野古道沿いで，協力が得られた33社寺を選んだ。2007年3月20日　紀伊民報

(http://www.agara.co.jp/modules/dailynews/article.php?storyid=121691 2008/09/23取得)

というように，地元NPOが，世界遺産に登録された社寺を含む，新たな観光コースの企画を創り上げたりする契機ともなっている。

そもそも，熊野地方は，近代観光が成立する以前から，霊場と参詣道が世界遺産の対象となったように，熊野速玉大社（和歌山県新宮市），熊野本宮大社（同田辺市本宮町）熊野那智大社（同東牟婁郡那智勝浦町）の熊野三山は，古代末期において上皇の信仰をあつめ，中世期において，熊野詣でが，「蟻の熊野詣」と称されるほど，興隆を極めた。また，近世期においても，青岸渡寺（近世においては那智大社と同じ）が，西国三十三所巡礼の一番札所として，巡礼の対象となっていた。

このように，前近代において巡礼対象，現代においては，世界遺産として観光対象となっている熊野三山を含む熊野地方が，近代観光の成立期においてはどのように扱われたのかを本研究は調査し，考察したい。現在，世界遺産観光において，最終目的地となっている熊野三山は常に観光対象であったのであろうか。

1．観光について

熊野地方の観光について考える前に，観光という現象そのものについて考察したい。

フーコーのまなざし概念を観光研究に適用したアーリによれば，観光は余暇活動として，「規則化され組織化された労働」の対照物であり，「観光のまなざし」は，「賃労働と直接結びつかない対象」に向けられるものであり，労働とは明確に対比されるものであるとしている。そして，その観光のまなざしは，「社会的に構造化され組織化されている」ものであり，「記号を通して構築され」，「日常体験から区分されるような風景や町並みへの様相へと向けら」れるのであるが，「映画とかテレビとか文学とか雑誌とかレコードやビデオなどの非観光的な活動によって作り上げ」られ，強化されて，「写真や絵はがきや映画や模型などを通して，通常視覚的に対象化され把握されていく」ことによって，再生産と再把握をくりかえされているものであり，観光の専門業者が，観光のまなざしの再生産を後押しているとしている（Urry 1990=1995）。

人類学における観光研究の嚆矢となったスミスは，観光活動を成立させる三つの要素として，「観光活動＝余暇時間＋可処分所得＋地域に根づいた道徳観」という公式を示し，旅行に対する道徳観が，「その動機付けとその結果とられる旅行形態に密接なつながりをも」（Smith 1977=1991）つとして，ヨーロッパでは大学生がヒッチハイクをしながらユースホステルを泊まり歩く旅行形態が当たり前であるが，アメリカではそうではないなどという例を示しているが，アーリの論をふまえるならば，旅行の形態だけではなく，当然「何を観るべきか」についても社会文化的に規定されているものと考えられる。そして，それは，社会的に常に構築され続けているものであるといえる

だろう。

そして，観光概念についての再検討をおこなった加太宏邦（2008）も，「体験や買い物や食などが主である行為は，（中略）慰安になったり観光に付随する行為の一部になることがあっても，このことを協調しすぎると，観光施策は拡散」するとし，「観光の要件の中で，もっとも重要なのは，視覚依存の諸慣行であ」り，「『見る』ことが中心になる」と述べている。つまり，「日常生活から区分される」場所に移動し，観るべき価値のあるものに対してまなざしを向けることは，観光という現象において欠くべからざる構成要素であると考えられる。

また，人類学者の橋本（1999）は，「さまざまな要素が介入して形成される観光の今日的な問題を明確にするという戦略的な目的」のために，観光を「異郷において，よく知られているものを，ほんの少し，一時的な楽しみとして，売買すること」と定義づけ，この「一時的な楽しみ」のために，「本来の文脈から切り離され，集められ，あらたな『観光文化』」が形成されるとしている。加太の述べるように「見る」ということが，観光の重要な要件とするならば，見られる対象は観光客にとって（そして，観光客が所属するゲスト社会においても），「よく知られた」ものであるということになる。そして，それは，橋本が研究の中心的な対象としている，民族文化だけではなく，例えば，自然景観においても，「本来の文脈から切り離されて，集められて」，新たな「観光における見るべき価値」が形成されると考えられる。

もちろん，橋本の述べる民族文化の本来の文脈というものが固定的に措定できるのであろうか，という疑問も成り立ちうると思われるし，自然景観においてはよりその傾向が高いであろう。ただ，観光という社会現象のなかで，ホスト社会の文化にしろ，自然景観にしろ，観光対象となったものが，一時的な楽しみのために訪れた観光客のために，それまでとは異なる文脈の中に置かれ，新たな解釈をなされるということであり，そして，観光とは，観光客が，実際は見たことはないが，情報としてはすでに見るべき価値があることを知っているものを見るということが大きな特徴としてあげられるということになる。

前人未踏の地に分け入り，これまでの人類が発見し得なかったものを見つけ出すような探険とは異なり，観光客は，全く知らない場所を訪れるわけではない。このように考えるならば，観光客（ゲスト）と観光対象のある場所（ホスト社会）をつなぐ，とくにゲスト社会における，ホスト社会の情観光情報—何が見るべき価値があるのか，そして，それは何故価値があるのか—は，観光を観光たらしめる大きな構成要素としてその研究対象として浮上する。

2．ガイドブックについて

アーリは，観光のまなざしは，「映画とかテレビとか文学とか雑誌とかレコードやビデオなどの非観光的な活動によって作り上げ」られるとしている。事実，例えば，韓国のドラマが日本社会においてブームとなることによって，それまで観光客が訪れることのなかったそのドラマのロケ地を観光ルートとする企画が，いくつもの旅行会社によって創られ（遠藤 2004），また，48作ものシリーズ映画となった「男はつらいよ」の舞台となった柴又は，ガイドブックにも，

> 柴又には，映画『男はつらいよ』で使用された撮影セットが見られる葛飾柴又寅さん記念館をはじめ，寅さんファンならずとも行ってみたいスポットがいっぱい。柴又駅から歩くルート

がおすすめだよ。

として，柴又駅から，映画のモデルとなった団子屋，寺院などを巡るルートが紹介されている（昭文社「マップルマガジン東京」2008）。

しかし，遠藤は，韓国のドラマのロケ地が観光ルートとなったことについて，

> 単にドラマがヒットしたからだけでなく，そうした視線を強化・再生産しようと，観光業者，メディア制作者，行政，地域住民，さらにはツーリストを含めた，実に多くの錯綜する利害関心をもつ立場がポリフォニカルな関係性の中で結びつき，一定の視線からの風景をくりかえし提示しているからなのである（遠藤 前掲書）

と分析するように，テレビドラマや映画，あるいは文学などが，—それらがいかに人気を博し，影響を与えたとしても—単独で，それが観光対象となるわけではないと考えられる。

観光研究の初期において，すでにコーエンが，今日の制度化された観光について，「ツアーの前に，旅行資料に出ていたり，旅行エージェントによって示されたりしているいくつかの基本的なアトラクションや設備に，主に注意を払うように条件付けられ」ており，これによって，観光客には，「独特の選択的認識が生じている」（Cohen 1972）と，ガイドブックと観光業者が，観光客が何を見るべきであるかを選択し，観光に影響を与えていることに言及している。また，観光を疑似イベントと論じたブーアスティンも，「近代の観光案内書は，観光客の期待を増大」させ，「その土地の人々に観光客がいつ，何を期待しているのかの詳細な項目別リストを提供」していると論じ，とくに，ベデガーのガイドブックの「スターシステム」について，

> ベデガーを持って旅行した人ならば誰でも，星の付いている名所を全部見物した時の満足感と，逆にたいへんな苦労と費用をかけてわざわざ見に行った名所が，後で一つの星も付いていない場所だったということを発見した時の失望をしっている（Boorstin 1962=1964）

とし，ガイドブックを「観光客が見物する芝居のための最新の脚本」であるとしている。また，彼らの指摘から何十年と経った現在においても，例えば，日本交通公社がおこなった，「旅行の計画を立てる際の情報収集源」のトップは「旅行ガイドブック」であり，63.4％の回答者がガイドブックを情報源とするとしている。

これらから，たとえ観光のまなざしが，映画やテレビドラマなどから創り上げられることがあったとしても，「観光の専門業者による後押し」によって，それらは見るべき対象となるものであり，ガイドブックは，観光情報の検証において重要な対象であると言うことができる。

コーエンのツアーガイドの分析（Cohen 1985）おいて，指摘したツアーガイドの４つ機能をガイドブックに適用し，考察したバッタチャリヤ（1997）は，「『ツアーパーティの凝集性と気力に対する責任』に関する社会的リーダーシップ」は，ガイドブックには認められないが，残る３つの機能は認められるとしている。すなわち，先導者として地域をナビゲートし，「現在進行中の社会的活動としてのツアーの円滑な達成に対する責任に関連する」道具的リーダーシップ機能を詳細な地

図などを掲載することによって果たし，また，「泊まるべき場所」や「食べるべき場所」を掲載し，評価することによって，「観光客が様々なサービスや設備を獲得できるように地元民との相互行為を仲介」する機能であるツアーガイドの「相互作用媒介」も持っているとしている。そして，「地域の環境の中にある対象を，観光客が注目すべき価値があるして有徴化」し，その選択した対象を描写し，背景などを説明し，評価することによって，観光客と観光地を媒介する「コミュニケーション的媒介」も認められるとしている。

これらの，ガイドブックの機能についてのバッタチャリヤの指摘の中で，これまでの考察を踏まえるならば，最も注目したいのは，ホスト社会の中から，見るべき価値のある名所を選択し，その価値を説明し，読者（＝潜在的，あるいは現実の，そして，かつての観光客）に伝えるコミュニケーション的媒介機能である。ガイドブックには，社会における見るべき価値を収集し，再構成しそれを読者に伝える，観光情報のアリーナとしての機能があるということができるだろう。このように考えるならば，ある地域における観光現象を調査するときに，その地域を対象とした観光ガイドブックをその対象とし，何が選択され，なぜ見るべき価値があるとされているのか，その選択された対象の語られ方を調査することは重要であると思われる。本研究においては，熊野地域のガイドブックを，近代観光が成立した明治期から調査したいと思う。ただし，その対象期間は，紙幅の関係上，対象地域が，吉野・熊野国立公園がとなった昭和初期までをその中心とする。

3．明治期の熊野地方のガイドブック

日本におけるガイドブックは，英文で書かれた外国人向けのものは1880年代より出版されていたが（里居他，2003），日本人向けのものとしては，1892年（明治25年），野崎左文によって『東海東山漫遊案内』が出版され，ベストセラーになり，夥しい数の類書が出版されるようになってからであるとされる（五味，2000）。

それらのガイドブックについて五味は，1903年（明治36年）に出版された坪谷水哉の『日本漫遊案内』の京都の記述が，まず歴史を５ページにわたり記された後，概観・交通機関・旅館などの情報が記載されていることを例としながら，当時のガイドブックを「旅という水平の糸をたどると，歴史というタテ糸が手繰り寄せられてしまう媒体」であり，「〈学ぶ〉ことが旅の重要なテーマとして前景化されている」としている。

本研究の対象地である熊野地方も，このような明治20年代後半からのガイドブック出版ブームの中で，取り上げられていった。

例えば，1896年（明治29年）に出版された松本謙堂編の『日本漫遊案内旅行錦嚢』では，南海道の部のなかで，「那智瀑は那智山に懸り本邦瀑布中第一の壮観にして其高さ八十四丈，幅，十八間餘あり」などと取り上げられているが，この書は，畿内と七道に北海道と台湾を加えた章立ての中で各地域の山岳や河川をそれぞれ列挙していくという形式であった。この中で，後のガイドブックにも記載されて，なおかつ，この書の中で，名前を上げられるだけではなく，何らかの説明をされているものは，河川では，熊野川，温泉では，湯ノ峯温泉であり，後の白浜温泉は取り上げられておらず，また，名所・旧蹟・神社・仏閣において熊野三山のいずれも取り上げられてはいない。熊野川は，「源を河内の金剛山に發し十津川と稱し紀伊の南隅より諸流を合し熊野浦に注ぐ其流程三十五里」と地理的説明だけであるが，湯ノ峯温泉については，「湯の峯鑛泉は崇神天皇の時發見せ

られ天皇屡々此地に行幸し玉ひしと云ふ故を以て今日に至るまで浴客頗る多し」と歴史と現在を簡潔ではあるが記している。

続いて，1899年（明治32年），遅塚麗水著の『日本名勝記』においても「那智の瀧，瀞八町」として熊野地方が取り上げられるが，題名の通り，その記述は那智の滝と，瀞峡が中心であった。那智の滝は，「那智の山は紀州の東牟婁郡に在りて…一路林を穿つて行くこと數丁，平地あり，屋を作て觀瀑のところとなす，仰いで見れば，涼々として大瀑布懸る」から始まるが，その記述の大部分は，江戸時代後期の医者，橘南谿の紀行文『西遊記』（全体の約半分）と那智の滝が舞台となっている『平家物語』の「文覚荒行の条」の引用からなっている。瀞峡についても，前人の記すところの瀞八町の記として，儒学者の藤沢南岳が，1886年（明治19年）に著した，『探奇小録』の引用が75％を占めている。

また，同年には，中山昇三編によって，『紀伊国旅の友』という和歌山県のみを対象地域としたガイドブックも出版されているが，その中で，熊野地域は，西牟婁郡が，田邊城趾・湯崎温泉・白良の濱。東牟婁郡は，熊野速玉神社・佐野松原・熊野夫須美神社・青岸渡寺）・那智瀑布・熊野座神社・湯の峰温泉・熊野川が取り上げられている。この中で，那智の滝が，全体の約40％の分量を占め，「扶桑第一の名瀑といふも虚言にあらざるなり」とされている。また，各名所は，その場所が読み込まれた和歌が引用されており，那智の滝は５首が引用され，熊野川は２首が引用されている。ただ，熊野川は「本宮より此川を下ると九里餘にして新宮に達す其間水流急にして船の行こと矢の如く奇巌両崖に聳え風景頗ぶる佳なり俗に之れを九里八丁と云ひて其名世に知らる」とされ，本宮から新宮の間，現在，川の熊野の古道として世界遺産に指定されている区間が九里八町として選ばれており，瀞峡への言及はない。同じ年に出版された野田文六編の『和歌山名所案内及附近名所』においても，熊野川では，九里八丁が「風景頗る佳なり熊野第一の奇觀」として選ばれ，瀞峡は言及されていない。

1902年（明治35年）には，探勝会編により，全国の避暑旅行のプランと旅の心得からなる『避暑旅行案内』が出版されているが，熊野地方では鉛山温泉（現在の白浜温泉）と那智の滝が取り上げられており，那智の滝は，移動手段や交通費と共に，「仰ぎ見れば海内無雙の大瀑布は截然八十餘丈の絶壁より直下す」として，江戸時代後期の商人であり数多くの紀行文を残した小津久足の紀行文を引用しており，引用は半分以上を占めている。

このように，19世紀まで，あるいは20世紀初頭までの熊野地方におけるガイドブックの記述は那智の滝がその中心であり，熊野川については，取り上げられないことも多く，またその取り上げられる場所は，瀞峡と九里八丁のどちらかであり，必ずしも瀞峡ばかりではなかった。そして，取り上げられた場所は，文学―紀行文，和歌，あるいは物語の中のエピソードを引用することによって語られ，価値付けられていたと言えるだろう。

だが，この那智の滝を賞賛する記述が変化を見せる。1905年（明治38年）に，坪内善四郎の編によって出版された『日本漫遊案内』では「熊野地方及其附近」という章が立てられ，潮見峠・近露村・湯峯温泉・本宮町・熊野座神社・熊野川・瀞八町・新宮町・熊野速玉神社・那智山・那智瀑・樫野浦の紀念碑・木の本町・尾鷲町が選ばれ，全体で84行が費やされているが，那智の滝は４行にすぎず，熊野川が14行，瀞峡が19行に渡って記述され，瀞峡が最も詳しく述べられている。そして，那智の滝は「日本第一の瀑として其名甚高けれど，日光の華厳瀑などに比して，高さも，美しさも，

雄大壮厳なる點も皆劣りたるは惜しむべし，殊に，山の淺きと，瀧の岩に傳りて落つるとは，この瀑をして雄大の趣を欽かしむ。されど海内有數の名瀑たるは勿論なり」として，名瀑ではあるが，雄大さに欠け，華厳の滝に劣るとされている。それに対し，瀞峡は，「其風景は娟麗にして中に無限の寂寞を籠めたる，天下又この奇景ありやと驚かるゝばかりなり」として，水戸藩の儒者であった青山延寿が1886年に著した紀行文『大八洲遊記』が引用されている。この那智の滝を雄大さがないとし，瀞峡を天下の奇勝とする評価は，続く大正期以降より顕著になり，定着していく。

4．大正期以降の変化

1914年（大正３年）に田山花袋編として出版された『新撰名勝地誌』は，熊野地方について，田邊町・田邊城趾・闘鶏神社・海藏寺・湯崎温泉・白良濱・蟾蜍岩・中邊路，大邊路日置・周参見村・二色港・串本町・橋杭岩・大島・古座・古座川諸勝・柏郷銅山・勝浦港（赤島温泉）・南平邊鑛山・那智鑛山・那智瀧・熊野夫須美神社・青岸渡寺・本宮村・熊野坐神社・湯峯温泉・東光寺・熊野川・瀞八町・松澤炭田・音川炭田・奥谷炭・宮井炭田・濱宮・補陀落寺・三輪崎町・新宮町・熊野速玉神社・阿須賀神社・神倉山・徐福墓・布引瀧の項目が選ばれ，661行費やされている。その中で，那智の滝は，93行と最も多く割かれてはいるが，

> 瀑布は那智山腹流紋岩の絶壁に懸り，直下すること八十餘丈と稱するも，大日本地誌編者の空盒_雨計により實測する時には百五十米突（五十餘丈）にすぎずといふ・従來本邦第一の瀑布と稱せられたるも，水量多からず，瀑壺甚大ならず，加山淺く，谷深からず，壯絶と云ふよりも，纖巧と云ふべき，雄大豪壯の風に乏しきは瀑布の爲に惜しむべきなり

と，実際の計測結果，それまでの言い伝えられてきた高さよりも低かったとし，「雄大ではない」という『日本漫遊案内』と同じ評価を下している。そして，滝の岩の種類を紹介している。

これに対し，瀞峡は，那智の滝に続く52行が費やされており，「當國の絶勝として世に名高き瀞八町」とされ，

> 奔流此處に至りて淀みをつくり，水面鏡の如く滑らかにして，兩岸の絶壁は屏風を立てたる如し。渓流の深きところ十五尋，舟を此處に泛べて遊ばんか，赤壁の勝もまた□ならず。此の渓或は山崩れの爲め河流閉塞せられて生じたるものとせば，水餘りに深きに過ぎ，兩岸數十丈の絶壁はまた閉塞湖として説明する能はざる所なり。蓋し思ふに往古玆に一瀑布ありて浸蝕作用の爲めに漸次退却したる遺跡ならんか。地は山間に偏し交通不便の處にあるに拘らず，旅人の杖を曳くもの多き，また其の如何に風光の優絶なるかを知るに足らん

と記されるように，「絶勝」であるとか，「赤壁の勝」より勝れているとの評価以外に，滝の浸食作用によって瀞峡ができたという地質学的な説明を加えている。これは，この本が出版される９年前に，『地質学雑誌』という学術専門誌に，東京師範学校教授であった佐藤傳藏が，「紀州名勝瀞八町に就きて」という文章を寄せ，その中で，「閉塞湖」説を否定し，

余は此の瀞八町を以て瀑壺の遺跡ならんと考ふる者なり。（中略）山間の渓流に種々の事情に起因する瀑布が存在し得ることは當然の事にして，此の瀑布が一方に於ては垂直的に其の浸蝕力を逞ふして深淵なる瀑壺を遺り，一方に於ては水平的に其の浸蝕力を逞ふして其の懸崖を削り，斯くして瀑布の位置は彼のナイアガラ若くは，華厳の瀑の如く漸次に退却すると同時に，瀑壺の位置も亦此と伴ふて次第に移動し，遂に浸蝕力は瀑布の原因たる懸崖をば全く打破して瀑布なる現象は殆と全く之を見るべからざるに至らしめたゞ其の名残として長き瀑壺と，削れるが如き絶壁とを残すに過ぎざるに至りしならんか

と，滝の浸食作用による後退説を唱えたことをそのまま採用したのだと思われる。そして，この滝の浸食作用による瀞峡の成立という言説は，この『新撰名勝地誌』の刊行以降，長くガイドブックに記載されることになる。

西田（2004）は，古代から中世期にかけて，自然景は，「宗教のまなざしで捉えられた信仰の地，神話のまなざしで捉えられた伝説の地，文芸のまなざしで捉えられた歌枕の地で編成」されていたとし，江戸時代に知識人層によって自らが風景を発見する「好奇のまなざし」が生まれ，明治時代の後期に入り，志賀重昂の『日本風景論』にみられるような「科学のまなざし」によって自然景を捉えるようになっていたとしている。また，小泉（2002）も，江戸時代の前期においては，日本三景などのように海景を名勝としていたものが，後期において，「山が美しいもの，素晴らしいものとみなさ」れるようになり，明治期後半から「文学や歴史に登場する名所旧跡を重んずるようなものから，（中略）自然の風景そのものを素晴らしいとみなす風景観に変わ」ったとしている。

これらの議論をガイドブックの熊野地方の記述にあてはめるならば，明治三十年代半ばまで，西田の述べる文芸のまなざしと奇勝のまなざしは，区別されずに，両者とも先人の残した文学として，その中で記述された風景が選択され，それらを引用する形で風景の価値が提示されていたということができるだろう。このように考えるならば，熊野川において，瀞峡とその下流の九里八丁がどちらを掲載するかというレベルでばらつきがあることも理解できる。なぜなら，瀞峡が賞賛されるようになったのは，「藤沢南岳の『探奇勝録（ママ）による』とされるので，1886年以降であると考えられる，地方の出版社から出された『紀伊国旅の友』や『和歌山名所案内及附近名所』の編者にはその情報が十分には行き渡っていなかったのではないかと考えられるからである。それが，明治30年代の半ば以降，小泉の述べる「自然の風景そのものを素晴らしいとみなす風景観」が広がることにより，「雄大さ」が大きな基準となり，ガイドブックの選択，—どの対象を選択するかというレベルではなく，どの対象に大きなスペースを割くかというレベルで—が変動したと見ることができるだろう。

そして，この「科学のまなざし」は大正期以降，「動物，植物及び地質鉱物で我が国にとって学術上価値の高いもの」を保護する史蹟名勝天然紀念物保存法が1919年に成立し，その選定方針に「我が国の代表的な自然の大風景地」であることと「社寺，史蹟，天然記念物等に豊富なこと」が含まれる国立公園法が，1931年に成立したように国家によって公認される。そして，国家にオーセンティシティが付与されたことそれ自体と，それがメディアを通して広められたことにより，より多くの人を引きつける観光のまなざしとして変換されていったと言えるだろう。

学術的価値の高いものを保護する天然記念物の指定だけではなく，国立公園の選定においても，

その調査は，「理学系の学者が担当」（黒田乃生 小野良平 2004）し，「原始的なスケールの大きい山岳風景」（田中正大 1981）が選ばれることになった。その中で，熊野地方は，「日本は世界屈指の火山國であるが故に，國立公園中全然関係を有しないものは，僅かに吉野及び熊野國立公園あるのみである」（綱島定治，1933）として，唯一の水成岩主体の風景地である「吉野・熊野国立公園」となった。

吉野・熊野国立公園は，例えば，

> 「陽光に滿ちた樂園　大和アルプスと紀南の祕境瀞八丁」
> 大げさに云へば冬のない國，この紀伊半島南端の地の自然は，多角的な日本の風景の中で，あの瀬戸内海などと共に最も和やかな一面を代表したものと云へる。一歩陸地を離れゝば，命知らずの船乗さへ恐れる暗礁と怒濤に名高い熊野灘だが，その潮流のお陰を蒙つた紀南の地は北側を山地に圍まれて，自然の温室をなして居る（朝日新聞社 1932『アサヒグラフ臨時増刊國立公園號』）

と紹介されるように，その気候について，「潮流のお陰」と科学的な説明を加えられ，温暖さが強調された。そして，この『アサヒグラフ』で吉野・熊野国立公園のなかで，具体的に取り上げられた対象は，大峰山と大台ヶ原・瀞峡・勝浦海岸の４つであり，那智の滝は取り上げられなかった。熊野地方で取り上げられた瀞峡と勝浦海岸がどのように描写されたというと，瀞峡は，

> 何故この瀞峡のやうな，深淵がこゝに出来たかといふと，まづ第一がこの流域の地質が硬いためだ。殊に中世層の地域は堅くて水の浸食少く，曲折が多い，第二はこの地方の降雨量の豊富なこと何しろ，年六〇〇〇粁（ママ）を越えるといふ雨のため。第三は地盤の隆起のため河底の浸食が旺盛になつたこと。そしてこの深淵に，南國の森林がよく繁茂するため水ます（ます）碧い幽境が出来上がつたわけだ

と，地質学的な地形の由来がその描写の中心となっている。一方，勝浦海岸も，

> 日本三景の古典的な松島を思ひ出させると同時に，海近く温泉が湧き出て居るのだから大したものである。勝浦港の紀の松島など土地の陥没と海波の浸食で盆景のやうな島々がぽつかりと浮かんで居りしかもその島に温泉が湧くあたりのどやかな眺めである

というように，やはり，地質学的な説明が加えられている。

その国立公園の指定と前後して，熊野地方の天然記念物指定も進んだのであるが，瀞峡の下流部，瀞八丁が，1928年に天然記念物と名勝の指定を受けたのに対し，那智においては，滝ではなく，その背後の那智原始林が天然記念物の指定となった。

そして，国立公園指定以降のガイドブックは，1937年（昭和12年）大阪鐵道局運輸部旅客課が発行した『熊野めぐり』においても，翌年，日本旅行協會が発行した『紀伊・熊野地方』においても，表紙は瀞峡が飾っている。また，本文内で掲載された写真でも，『熊野めぐり』では，瀞峡が見開

き２ページであり，那智の滝は１ページ弱の大きさ。『紀伊・熊野地方』では，那智の滝は青岸渡寺の境内の遠景として掲載されるのみである。

また，文章部分については『熊野めぐり』では，那智の滝は７行に対し，瀞峡は21行が使われている。そして，『紀伊・熊野地方』では，那智の滝は32行。瀞峡は48行に渡る文章と渓谷内の岩の名前を記した地図が掲載されている

このように国立公園制度の成立期においては，明治期に熊野地方の中心的な観光対象として取り上げられていた那智の滝が後退し，瀞峡が熊野地方の代表的な風景地として取り上げられるようになった。そして，その記述も，『新撰名勝地誌』を引き継ぎ，瀞峡については，「この峡谷の成因は太古こゝに一大瀑布があって浸食作用によつて漸次後退した瀧壺の遺跡であらうと云はれてゐる」（大阪鐵道局運輸部旅客課 1937『熊野めぐり』）というように，地質学的な説明がまず冒頭に加えられている。そして，那智の滝についても，

> 一ノ瀧は普通一般に那智の瀧としてしられてゐる所で，那智川の上流海抜三百米の絶壁に懸り，幅廣き流紋岩の岩壁を斫つて直下すること凡そ一三〇米，幅十三米（瀧壺の深さ二米）で，古來扶桑第一の瀧と稱せられ，晴天の比は遠く海上より望見し得ると云ふ。然し近年，上流國有林の伐材により水量は昔時に比し著くし減じたと云はれ，（中略）華嚴の壯絶極りなきに比し寧ろ女性的に感ぜられる（日本旅行協會1938『紀伊・熊野地方』）

というように，岩石の種類の記述と華厳の滝のような壮絶さはなく女性的であるという評価を受け継ぎ，その原因として，上流部の森林の伐採が上げられている。

まとめ

これらの熊野地方に対するガイドブックの，選択と記述の変化をみてみると，明治期においては「文学的価値」に支えられた伝統の中の場所が選択されており，その中では，那智の滝に注目が集ったと考えられる。その滝は，言い習わされてきた高さである八十四丈とされ，先人の描写を引用し，「此の記善く那智の瀑布の景致を盡せり」とするように，先行する文学によってどのように表現されてきたかが，その解釈の中心となっている。

そして，大正期から，天然記念物や国立公園が制度として成立していった時期には，自然科学的価値に支えられた地質学的な岩の造形美に注目が集ったといえるだろう。この時期には，「浸食作用によって漸次後退した遺跡」である瀞峡が風光優絶として，「ぜひ見たい」場所であり，那智の滝も，実際に高さを計測し，文学的描写よりも前に，岩の種類が紹介されていた。

もちろん，文学的描写の記述が，大正・昭和期においてガイドブックから消え去ったわけではない。例えば，日本旅行協會の『紀伊・熊野地方』の瀞峡の記述は，

> 明治の文豪田山花袋先生は『瀞八丁は私の見た渓谷の中で最も優れたものであつた』と紀行文に書かれ俳井泉水先生も『瀞の月を見てゐると，あらゆるもの、感情がすーっと蘇つて來やうだ』と賛美され，畫家の方々には日本畫，洋畫の區べつなく，いづれも絶賛の言葉を戴いて居ります

という，瀞峡の「プロペラ船案内嬢の説明」をそのまま紹介しているように，風景を賛美するにおいて勝れた文学作品や，小説家の文章の引用は，引き続きおこなわれている。

しかし，それらの記述の前に，自然科学的説明が加えられているということとともに，限られたスペースであるガイドブックの中で，どの対象にどれだけのスペースを与えるかというレベルにおいて，すでに，自然科学的な価値による選択が働いていると考えられるだろう。

以上のことをふまえるならば，「社会的に構造化され組織化されている」観光のまなざしは，近代国家の成立という社会変動の中で成立し，社会変動の中で変容していったと言えるだろう。そして，その変容を捉えるときに，ガイドブックによる観光対象の選択と記述は有効な指標となると言えるだろう。

参考文献

Bhattacharyya, Deborah P. 1997 Mediating India: An analysis of a guidebook Annals of Tourism Research, Volume 24, Issue 2 , Pages 371-389

Boorstin, D. J., 1962, The Image, Atheneum.（＝1964『幻影の時代　マスコミが製造する事実』星野郁美・後藤和彦訳，東京創元社）

Cohen, E. 1972 Towards A Sociology of International Tourism, in Social Research, 39: pp.166-67.

Cohen, E. 1985 The Tourist Guide: The Origins, Structure and Dynamics of a Role. Annals

遠藤英樹，2004「観光空間・知覚・メディアをめぐる新たな社会理論への転回」『「観光のまなざし」の転回』遠藤英樹・堀野正人編　春風社

五味信，2000「書を持て，旅に出よう―明治三〇年代の旅と〈ガイドブック〉〈紀行文〉―」『日本近代日本文学』63日本近代文学会

橋本和也，1999『観光人類学の戦略　文化の売り方・売られ方』世界思想社

加太宏邦　2008「観光概念の再構成」社会志林 Vol. 54, No. 4 pp.27-62　法政大学社会学部学会

小泉武栄，2002「日本人の風景観と美的感覚の変遷―万葉時代から現代まで―」東京学芸大学紀要３部門53

黒田乃生・小野良平，2004，「明治末から昭和初期における史跡名勝天然紀念物保存にみる『風景』の位置づけの変遷」『ランドスケープ研究』67（５）：pp.597-600

西田正憲，2004「自然観光における観光のまなざしの生成と発展」『「観光のまなざしの」展開』春風社

里居真一・羽生冬佳・十代田朗・津々見崇，2003「明治中期に刊行された外国人向け英文観光ガイドブックの記述内容の特徴」『ランドスケープ研究　日本造園学会誌』Vol.66, No.5 pp.389-392　社団法人日本造園学会

Smith,Valenne L.ed. 1977 (1989), Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism,Philadelphea: The University of Pennsylvania Press (1989は２nd edition)（＝三村浩史 監訳 1992『観光・リゾート開発の人類学―ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房）

田中正大，1981，『日本の自然公園自然保護と風景保護』相模選書

網島定治編，1933，『日本の国立公園』日本国立公園図書刊行会．

Urry, J. 1990 The Tourist Gaze:Leisure and Travel in Contemporary Socies,Sage.＝1995 加太宏邦訳『観光のまなざし―現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局）